

又ソグドのものであつたかも知れぬ、ともかくツルファンにトカラの經の存するのはトカラの僧が來た時に將來したか、或は此地方の人が持つて歸つたのか解らないけれども、何れにしても同様の事情は支那に於ても存したことであろう、古い言葉をかりるならば、胡梵兩様の系統は支那の佛典には免かれぬことであろうと思ふ、麗藏などに見ゆる胡梵の書き分けは一見結構な様であるが、こまかに見ると全く役にたかないもので、全然標準によつて立てた區別ではない、即ち胡も梵も同様の意味に使用して居るにすぎぬ、此點から云へば元明板に梵と換えてしまつて居るのは亂暴な様ではあるけれども、實は少しも差支へのないわけである、只贊寧一人重譯直譯の區別を説いて『一
直譯、如五印夾牒直來東夏譯者是二重譯、如經傳嶺北樓蘭焉耆、不解天竺言、且譯爲胡語、如梵云陽波陀耶、疎勒云鶻社、于闐云和尚、又天王梵云拘均羅、胡云毗沙門是、三亦直亦重、如三藏直齋夾牒而來、路由胡國、或帶胡言如、覺明口誦曇無德律、中有和尚等字者是四二非句、即齋經三藏、雖兼胡語、到此下翻譯者是』云々といふて居るのは、言葉の穿鑿の當否は暫らくおいて、一體に能く事情を穿つたものといふべきである、同一の經で今日梵漢相合せぬものがあつたり、或は同一經の翻譯で支那と西藏のものと合せぬ點があつたり、尙ほまた譯語の上に不審の存したりするのは、翻譯者の如何によることは勿論ながら、かゝる事情に胚胎するのも少くなからうかと考へる。

以上はたゞ新たに知られた事實と古人の記する所とを参照して、漢譯の佛典に印度以外の言葉から譯せられたものが一二ならずありはせぬかと疑がふたにすぎぬ、もとより言語のことも經典のことも解らぬからして、偏に此方面の學問に従事せらるゝ人々から此れに關する示教を受けたいと考がへたまでである。

(藝文第二卷第二號、明治四十四年四月)